

# 河東碧梧桐與句會「綠珊瑚」會 —新傾向俳句在臺灣之發展—

沈美雪

中國文化大學日本語文學系助理教授

## 摘要

河東碧梧桐在明治 41 (1908) 年為了臺灣縱貫鐵路完工的取材而來到臺灣，受到俳人們的熱烈歡迎。在此次臺灣行中，碧梧桐與俳人召開句會，將重視實際體驗、個性的「新傾向」風潮帶進了臺灣。當時的臺灣俳句界有「相思樹」及「綠珊瑚」會兩派形成對立狀態，綠珊瑚會自碧梧桐來訪後會歸屬碧梧桐派，並以新季題趣味的發現及開發為目標，吸引了眾人的支持。而綠珊瑚會的中心人物小林李坪推廣新傾向俳句，更在明治 43 (1910) 年出版收錄臺灣季題的『臺灣歲時記』。諸如上述，在探討相思樹派及綠珊瑚會兩派勢力的消長時無法忽視碧梧桐的影響，另外碧梧桐的新傾向俳句運動也成為明治末期臺灣俳句發展的一個重要目標。而大正 5 (1916) 年之後綠珊瑚會的影響力漸漸變弱，其背後深受著碧梧桐派分裂而勢微的影響。

新傾向運動在臺灣俳句界的發展於明治末期達到頂點，而於大正初期急速衰退，但是臺灣季題的開拓在大正、昭和時期仍是俳句的創作重點。

關鍵字：河東碧梧桐 新傾向俳句 小林李坪 「綠珊瑚」  
『臺灣歲時記』

***Hekigotou Kawahigashi* and “Rokusangou”;  
The development of the New Trend Haiku in Taiwan**

Shen, Mei-hsueh

Assistant Professor, Chinese Culture University, Taiwan

**Abstract**

*Hekigotou Kawahigashi* came to Taiwan as a journalist for the news report on the commemoration of the opening to through traffic of Taiwan’s Trunk Railroad Line in 1908. In the trip, he held a haiku gathering with Taiwanese haiku poets and brought the New Trend Haiku to Taiwan. There were conflicts between two haiku groups of “Rokusangou” and “Soushizyu ” in Taiwan haiku circle at that time. Owing to the visit of *Hekigotou* “Rokusangou” tended toward *Hekigotou* school and aimed to discover and create new haiku themes of nature. *Rihei Kobayashi* spread the New Trend Haiku in Taiwan, so in 1910 he published “Taiwan Compendium of seasonal words”.

In addition, the New Trend Haiku Movement became the important goal of the advancement of Taiwan haikus in the late Meiji Period. However, the Taiwanese mood was elaborated in haikus by Taiwanese haiku poets through Taisho and Showa era.

Keywords: *Hekigotou Kawahigashi*, the New Trend Haiku,

*Rihei Kobayashi*, “Rokusangou”,

“Taiwan Compendium of seasonal words”

# 河東碧梧桐と句会「緑珊瑚」会 —台湾における新傾向俳句の展開をめぐって—

沈美雪

中国文化大学日本語文学科助理教授

## 要旨

俳人の河東碧梧桐は、明治 41（1908）年、新聞記者として台湾縦貫鉄道全通記念の取材に台湾を訪れ、俳人より盛大な歓迎を受けた。そして、この来台において碧梧桐は、台湾の俳人らと句会を催したが、その際、実感を重んじ、個性の発揮を説くなど、新傾向の俳風を台湾に送り込んだのである。当時の台湾俳句界は、「相思樹」と「緑珊瑚」会とが対立していたが、碧梧桐の台湾来訪により、「緑珊瑚」は碧派の句会に転じ、新しい季題趣味の発見と開発を目標とし、多くの俳人の支持を得たのである。その緑珊瑚会の中心人物である小林李坪は、新傾向俳句の理念を台湾に広め、さらに、明治 43（1910）年には台湾の季題を集めた『臺灣歳時記』を出版した。台湾における緑珊瑚会と相思樹派との勢力の消長を探る上で、碧梧桐の影響を看過することはできない。だが、大正 5（1916）年を境に緑珊瑚会の影響力は弱まり、その背景には碧門の分裂による勢力衰微の影響があった。

このように、台湾俳句界における新傾向運動の展開は、明治末期には頂点に達したものの、大正初期には急速に衰退した。しかし、新趣味の開拓は、大正から昭和期を通して、台湾俳句創作の目標となったのである。

キーワード：河東碧梧桐 新傾向俳句 小林李坪 「緑珊瑚」 『臺灣歳時記』

# 碧梧桐と句会「緑珊瑚」会 —台湾における新傾向俳句の展開をめぐって—

沈美雪

中国文化大学日本語文学科助理教授

## 1. はじめに

河東碧梧桐は、近代俳句革新の祖といわれる正岡子規に師事して俳句を学び、子規から「印象明瞭<sup>1</sup>」と評価され、高浜虚子と共に子規門の双璧とされた。また、碧梧桐は、子規の没後、子規が選をしていた日本新聞社の「日本俳句」欄を受け継ぎ、積極的に俳句革新運動を推し進めた。そして、自称守旧派で、季題趣味と17字の定型を固守する虚子に対し、碧梧桐は、眼前の景色や事実をありのままに写し取ることを唱え、後に、新傾向俳句運動と呼ばれる風潮を引き起こしたのである。

また、碧梧桐は、明治41(1908)年に、台湾縦貫鉄道全通記念を取材するために新聞記者として来台したが、その際、俳人より盛大な歓迎を受けた。そして、俳人らと句会を催したことにより、実感を重んじ個性発揮を説く、新傾向の俳風を台湾に吹き込んだのである。

本稿では、このような台湾における新傾向俳句の展開に注目し、碧梧桐の台湾来訪が当時の台湾俳句界に与えた影響を明らかにするとともに、海外の風土における季の問題をとらえ直したいと思う。

## 2. 三千里の旅と新傾向俳句

碧梧桐は、明治39(1906)年と明治42(1909)年の2度にわたり、全国遍歴の旅に出ており、これが、いわゆる「三千里<sup>2</sup>」の旅で

---

<sup>1</sup> 子規は、「明治二十九年の俳諧」(『ホトトギス』、明治30年1月号)において、碧梧桐の特色を「極めて印象の明瞭なる句を作るに在り」と評し、碧梧桐を賞賛した。

<sup>2</sup> 第一次の旅の際に発表した碧梧桐の旅日記「一日一信」(当初は新聞『日本』

ある。第一次の旅は、明治 39 年 8 月に東京を出発、千葉、茨城、福島、宮城、青森の諸県を經由して、翌年には北海道に渡った。そして、5 月に再び青森に戻り、東北地方の日本海側を巡ったが、12 月に郷里の母が病気との知らせを受けて、長岡で一時的に中断した。その後、第二次の旅として、明治 42 年 4 月にあらためて東京を出発し、山梨から日本海側に抜け、中部から山陰地方を遍歴した。その後、全国行脚の足跡は九州、沖縄までに及び、延べ 28 カ月にもわたる長旅であった<sup>3</sup>。

この、三千里の旅の目的について、碧梧桐自身は、「小生の全国漫遊は兼ねてよりの希望を今度果すものにて別に深き意味あるにはあらず要するに小生の學問に他ならず候<sup>4</sup>」と述べていることから、自分の句境を広げようとする求道心による行動といえよう。また、栗田靖が、「俳人碧梧桐は自らの修養と新人の発掘を「旅」に求めた<sup>5</sup>」と述べているように、地方の俳人と親交を交わし、選句に可能性を求める旅でもあったのである。そして、碧梧桐は実際に、三千里の旅において彼を慕う俳人たちと「新傾向俳句」運動を展開したのである。

また、この「新傾向」という言葉は、俳人の大須賀乙字が明治 41 (1908) 年 2 月に、俳誌『アカネ』に発表した「俳句界の新傾向」という論からその呼称が生まれた<sup>6</sup>ものである。この際、乙字は「予は現今の俳句に新傾向あるを認める」と書き出し、碧梧桐が第一次の全国遍歴において仙台で詠んだ「思はずもヒヨコ生れぬ冬薔薇」の句を例に挙げ、「生まれぬヒヨコ」と「冬薔薇」に「感想上類似の

---

に、その後『日本及日本人』に連載)は、後に単行本『三千里』(金尾文淵堂刊、1910 年)にまとめられた。また、第二次の全国行脚の記録を集めた『続三千里』(金尾文淵堂刊)は、1914 年に刊行された。

<sup>3</sup> 碧梧桐の第一次の三千里の旅は、明治 39 年から明治 40 年にかけて 17 カ月、第二次の旅は明治 42 年から明治 44 年にかけて実に 28 カ月にも及んだ。

<sup>4</sup> 河東碧梧桐『ホトトギス』明治 39 年 6 月号の消息欄より。

<sup>5</sup> 栗田靖「河東碧梧桐「三千里」の旅の目的は何であったのか」(『国文学 解釈と教材の研究』、1996 年 2 月臨時増刊号、P30～P33)。

<sup>6</sup> 大須賀乙字「俳句の新傾向」(『アカネ』、明治 41 年 2 月号、P52～P58)。

點」があるとし、「此頃の陽氣は狂つたやうな日和續き」を暗示するその技術の高さを評価している。そして、碧梧桐自身もこの乙字の新傾向論に示唆を受けて、新しい革新運動に突き進んだのである。

さらに、子規没後、子規俳論の継承として、「碧梧桐が、事実在即した感じから句作しているのに対し、虚子が、一半は事実在即しながら、一半は連想からくる情感に依拠して句作している<sup>7</sup>」ことで、碧梧桐・虚子の対立は明治 36（1903）年から明らかになっていた。そして碧梧桐は自分の写生論を推し進め、三千里の旅を通して新傾向運動を展開し、明治末期の俳壇に新思潮を起こしたのである。

### 3. 碧梧桐の台湾来訪と台湾俳句界

#### 3.1 明治期の台湾俳句界事情

碧梧桐が初めて台湾を訪れたのは、明治 41（1908）年 10 月で、前述の通り、ジャーナリストとして台湾縦貫鉄道完工の取材をすることが目的であった。ただ、この台湾訪問は表向きの理由としては公務出張であるものの、台湾の俳人と対面し、台湾に新傾向俳句を広げたいといった思惑もあったと思われる。そして、実際、碧梧桐が台湾に着くと俳人から盛大な歓迎を受けて、連日のように歓迎句会が催されたのである。

当時の台湾俳句界は、高橋窓雨が率いる旧派と、岩田鳴球を中心とする「相思樹」派、小林李坪を中心とする「緑珊瑚」などの新派が入り乱れている時期であった。そして、台湾初の俳句専門誌として明治 37（1904）年に刊行された『相思樹』は新派句会の竹風吟壇が刊行元で、地方誌として中央俳壇から注目されたばかりではなく、台湾における新派の発展にも大きく貢献した<sup>8</sup>。しかし、明治 39

---

<sup>7</sup> 松井利彦「近代俳論史 俳句シリーズ・人と作品別巻」（昭和 48 年、桜楓社、P132～P133）。

<sup>8</sup> 『相思樹』の成立から廃刊までの経緯は、沈美雪「『相思樹』小考—台湾最初の俳誌をめぐる一」（『日本台湾学会報』第 11 号、2009 年 5 月、P233～P246）に詳しい。

(1906)年ころに相思樹陣営に分裂が生じ、創刊以来の会員である小林李坪、堀尾空鳥などが次々と脱会、『臺灣日日新報』にて活動するようになり、さらに明治40(1907)年5月に緑珊瑚会を結成したのである。

こうして誕生した緑珊瑚会は、門戸を広く開いて新旧問わず俳人を受け入れたその包容力により、短時間に急速な発展を遂げ、多くの俳人を傘下に収めることに成功した。そして、緑珊瑚会をライバル視する相思樹陣営からも、また、批判の対象だった旧派からも緑珊瑚会に加勢した俳人が続出する中、明治41年5月16日に創設1周年を記念する『緑珊瑚一周年記念号』が刊行された。このように、台湾俳句界が大きく揺れ動く中、碧梧桐が台湾を訪れたのは、『緑珊瑚一周年記念号』刊行の約5カ月後のことである。

### 3.2 碧梧桐からみた台湾—台湾を詠んだ句を中心に—

碧梧桐の台湾訪問の様子については、彼自身の見聞録と、台湾俳人の書き残した資料から知ることができる。前者は、「台湾だより」という題で、碧梧桐が明治41年12月1日に『日本及日本人』にて発表している<sup>9</sup>。また、後者においては、諏訪素濤の「二度の渡台<sup>10</sup>」と題する一篇の文章が、碧梧桐と台湾との関係を知る上での好資料である。

では、これらの資料に基づき、碧梧桐の台湾訪問について、概観してみたいと思う。まず「台湾だより」によると、碧梧桐は明治41年10月17日に台中丸に乗船し台湾に向かい、21日に台湾の港町である基隆に到着した。この台中丸は、もともとは台湾航路の定期船であったが、台湾総督府が訪問団のために貸し切りにしたものである。このことについて碧梧桐は、

來賓接待上、他の船客を混入せぬといふ必要もありしな

---

<sup>9</sup> 河東碧梧桐「台湾だより」(『日本及日本人』明治41年12月号、P55～P65)。

<sup>10</sup> 諏訪素濤「二度の渡台」(『海紅』昭和12年3月号、P71～P74)。

らんとは言へ、この一事先づ以て接待の用意を見るべきものありとも可申候。されど、一ヶ月何回の定期船を専用して、一般乗客を排斥すといふは稍々妥當を欠ぐかの感なきにしもあらず、それかあらぬか、當時何故臨時線船を出さぬかとの非難の聲もありしやに聞及び候<sup>11</sup>。

と、総督府の万全な接待の用意を認めながらも、それによって一般の乗客が乗船できなくなったことへの違和感を吐露している。事実、当時の総督府は、縦貫鉄道完工という領台後、最も重要な建設の成果をアピールするために、内地から台湾を訪れる記者たちへの歓待に力を惜しまなかった。この、定期船貸し切りの件もそうであるが、出迎えのために列車を棧橋まで運び、急ごしらえとはいえ乗り場まで作ったことも、総督府の意気込みを感じるに十分な出来事であったといえよう。

また、碧梧桐の台北での宿泊は、本来、「朝陽号」という台北一の旅籠屋に予定されていたが、旧友某に迎えられ、そのまま、府前街にある友人の住居に泊まることになった。そして、台北では相思樹派と緑珊瑚会の二派が合同で歓迎句会を台北川端清涼亭で催し、80名以上の俳人が碧梧桐の歓迎会に参列した。また、その席では500句以上の句が詠まれ、そして清書され、碧梧桐の選を乞うたことが、当時の参加者の一人である諏訪素濤によって記されている<sup>12</sup>。以下に、その「碧梧桐大会」で詠まれた句の一部を掲げておく。

里も見えて歸る案内や露の原	碧梧桐
籠負へば尻ひやひやと草の露	李坪
虎尾蘭の直なれば露流れけり	枕流
白露やシャボテンに竿立かけし	瘦牛

---

<sup>11</sup> 注9参照。

<sup>12</sup> 注10参照。

朝露や馬失ひし人に逢ふ 十 雨  
(碧梧桐大会 (一) <sup>13</sup>)

五反五劃開墾就つて虫遠し 素 濤  
(素濤「二度の渡台」)

この際、碧梧桐に続いて句を披露したのは、緑珊瑚会の代表者である小林李坪であった。李坪は、渡台前に東京のホトトギス句会に参加しており、碧梧桐と面識があったことから、二人は久しぶりの再会を喜び合ったことが想像できよう。そして、碧梧桐は、第一次の全国遍歴でつかんだ新傾向の俳句理念を、李坪を中心とする台湾の俳人に語ったであろうと思われ、実際、碧梧桐の来訪後、緑珊瑚会は新傾向俳句を作句の目標として掲げるようになったのである。

また、碧梧桐は、台湾という地を踏み、日本とはまったく異なる文化や気候風土を体験した。ここでは、碧梧桐が台湾の風土を詠んだ句を取り上げて、俳人としての碧梧桐の目から見た台湾を考えてみたい。

七星の七峰ほのと銀河哉 碧梧桐  
野分して鶏豚ありく倒れ木を

これらは、純粋な台湾風景の写生句である。七星峰（七星山ともいう）は、台北市の近郊にある陽明山（旧名：草山）の最高峰である。この標高は1,120mもあり、そこから見下ろす台北の景色は絶景である。碧梧桐が台湾を訪れたのは10月であり、秋晴れの夜空に天の川がさぞきれいに見えたのであろうことが、上掲の一つ目の句から感じられる。また、台湾では10月にも台風が襲来し、その威力は、外国からの旅客を驚かすほどである。一方で、台風の後には壊れた鶏舎や豚舎から出た鶏や豚が、倒れている木の間をあちこち歩く情景

---

<sup>13</sup> 『臺灣日日新報』明治41年11月12日。

にはこっけいさがあり、上掲の二つ目の句はそのような台湾の風景を表したものだといえよう。

十月の夏去る思ひ雨一日 碧梧桐  
南晴の北雨に秋を催しぬ

台湾は、北部が亜熱帯、南部が熱帯に属しており、気候の差はかなりのものである。そして、10月になると東北季節風が勢いを増し、雨をもたらすが、まるで夏のように暑かった昨日までの天気も、一日中降り続くこの雨が一気に訪れる秋を感じさせるのである。そのため、台湾での生活経験を有する者は、誰しも、上に掲げた二句に共感を持つことになるのであろう。秋に台湾を訪れた碧梧桐は、春夏秋冬の境界線があいまいな台湾において、その境目を見逃すことなく、それを句にしたためたのである。

秋暑榕樹の気根銅のごと 碧梧桐  
一竿に家鴨を指揮や落とし水  
仮寝覚めて守宮鳴く音や秋の蚊帳  
竹筏の投網の陣や鰻追へり

これらは、台湾の生活の匂いがひしひしと伝わってくる作品である。「榕樹の気根」、竿一本で動かされる「家鴨」、仮寝を覚ます「守宮鳴く」声、「竹筏の投網」、いずれも台湾の実生活を映し出す格好の素材である。そして、単なる表面的観察にとどまることなく、台湾の地を歩き、旅しながら思ったこと、感じたことを、そのまま句に表現した作品だといえよう。「仮寝覚めて」は、恐らく、中南部で作られた句であろう。北部のヤモリは鳴かないのに対し、南部のヤモリは鳥と紛うほど声高な鳴き声を出す。秋のある日、蚊帳に囲まれて仮寝をしていたら、ヤモリの鳴く声に目を覚まされてしまったことを記したこの句は、旅寝の一断面と台湾の何げない風景をスケ

ツチしたものである。

檳榔樹の花はいつ咲く実は秋か 碧梧桐  
甘蔗たけて雨なきに秋を知るといふ  
霸王樹の垣して蘭もいろいろに

南国の台湾では、植物の種類やその成長事情も温帯の日本とは異なる。そんな台湾の秋季において、檳榔樹の実るのを目にし、その開花時期に関心を持ったのが第一句の胸懐である。台湾人は檳榔子を嗜む習慣があり、特に、中南部では檳榔樹が大事に栽培されている。また、第二句に登場する「甘蔗」であるが、その栽培には、成長期に雨量が多く成熟期に乾燥するといった土地が適している。そのため、秋季に降雨の少ない中南部は、質のよいサトウキビが栽培され、それから良質の砂糖が採れる。つまり、この「甘蔗たけて」、「雨なき」といった情景は、台湾中南部の秋季の到来を告げるものなのである。そして、第三句にある「霸王樹」はサボテンの別名であり、南部の打狗（現在の高雄）では、それを垣根として盛んに植えていた。これらを目にし、種類の多い蘭に垣根のサボテンは、日本人の感興のそそる植物として映ったのであろう。

### 3.3 碧梧桐の足跡とその影響

先に紹介したいくつかの句からも分かるように、台湾を訪れた碧梧桐は台北のみではなく、その足跡は台中、台南、打狗（現在の高雄）にまで延びている。そして、台湾縦貫鉄道全通記念の式典が行われた台中においても、碧梧桐の歓迎句会が開かれ、当時、台湾銀行支店員の遠矢瀉丘の自宅がその会場であった。遠矢瀉丘は、台湾時代は岩田鳴球に師事していたが、明治 42（1909）年 10 月に大阪に戻ってからは碧梧桐に傾倒し、碧派の俳人に転じた<sup>14</sup>。このように、台湾各地の俳人は、中央俳壇の第一人者と対面し、その指導を

---

<sup>14</sup> 遠矢瀉丘「先生と桜島」（『海紅』昭和 12 年 3 月号、P67～P68）。

受けたことで自分の句境を高め、新傾向俳句に対する認識を深めたのである。このような碧梧桐の来訪が台湾俳人らにもたらした変化について、南海老の「俳壇小語（十四）」は次のように述べている。

碧梧桐の來臺は臺灣俳壇の革新であつた今まで五里霧中に彷徨模索して居た俳人は一道の曙光を認めて俄然向上した殊に綠珊瑚に屬する俳人の進境は著しいもので黙行一呱、句坊杯は嶄然頭角を露はした烏榿、李坪の元老株の作句も面目を改めた葛南は復活して俳句研究會を設けた綠珊瑚派の地方俳壇では深坑の拳會最も振ひ素濤、菱巴、宇洪等の熱心非常である同人間に綠珊瑚第二紀念號發行の議が起つて居る第一號に對照したら著しい進歩を示すであらう相思樹派は近來頓と振はず鳴球が臺南新報で没頭没脚と云ふ欄を設けて居るが餘り眼に付く様な句が出ない碧梧桐の喝棒で悟つたと稱する貉翁は意氣沮喪の姿で近來多く作句をしないのは惜しい事だ<sup>15</sup>。

上掲の記事からは、碧梧桐の来訪が、台湾の俳人らに一つの指標を示したことが分かる。特に、作句の意欲を刺激され、また、内容の面においても著しい飛躍を遂げた綠珊瑚同人の進歩にはめざましいものがあつた。例えば、新進の渡辺黙行、毛利一呱（後に天仙果と改号）、窪田句坊は頭角を現し、元老株の藤井烏榿、小林李坪も新しい境界をみせ、また、一時は句作から遠ざかった安田葛南も復活して俳句の研究會を設けたなど、碧梧桐が台湾俳句界、特に、綠珊瑚派に与えた影響は非常に大きかつたといえよう。

このように、綠珊瑚會は、時の人・碧梧桐を師と仰ぎ、碧梧桐派の句會と掲げたことで、台湾において最も有力な句會の一つとなつた。一方、それまで台湾の俳句界をリードしていた相思樹派は、以

---

<sup>15</sup> 南海老「俳壇小語（十四）」（『臺灣日日新報』、明治42年3月12日）。

前の勢いは衰えをみせ、碧梧桐の来訪を機に、次第に俳壇での影響力を失っていった。また、その前後を三千里の旅に挟まれたこの台湾訪問は、碧梧桐の全国行脚の延長線とみることができ、台湾俳人は碧梧桐と句会を催し、彼の指導と叱咤激励を受けることで、一段と活発に活動するようになったのである。

#### 4. 台湾における新傾向俳句の展開

ここまで述べてきた通り、台湾における緑珊瑚会と相思樹派の勢力の消長を探る上で、碧梧桐の影響を看過することはできない。また、碧梧桐の新傾向俳句運動は、明治末期における台湾俳句の進むべき重要な指標ともなった。これらを踏まえ、この小節では、新傾向派俳誌としての『緑珊瑚』の試みに焦点を絞り、論を進めていくこととする。

##### 4.1 新傾向の提唱—俳誌『緑珊瑚』の試み—

緑珊瑚会は、明治41年から年ごとに周年記念号<sup>16</sup>を刊行していたが、明治43年8月より月刊号（第4巻第1号）の出版を決行した。この「緑珊瑚月刊号」の一文に「本誌にして今後幸に其の一欠陥を補ひ、假令幾分たりとも、臺灣に於ける新傾向の普及と、新句境新趣味界開拓との筈蹄たるを得は、寧ろ望外の幸にして、又以て吾人の素志既に酬へられたりと云ふへきてある<sup>17</sup>」と記されているように、年刊を改めて月刊としたのは「新傾向の普及と、新句境新趣味界開拓」が目的である。そして、このような台湾における「新趣味」を俳人たちは「台湾趣味<sup>18</sup>」と称し、台湾俳句の目指すべき方向と

<sup>16</sup> 『緑珊瑚』「一週年記念号」は明治41年、「二周年記念号」は明治42年、「三周年記念号」は明治43年に刊行された。

<sup>17</sup> 「緑珊瑚月刊号」（『緑珊瑚』第4巻第1号、P1）。執筆者不明、編集の渡辺常三郎か。

<sup>18</sup> 「台湾趣味」はもともと小松吉久が提出した植民地文学の概念（「植民地文学《台湾趣味の發揮》」『台湾慣習記事』第5巻第10号、P829～P833）であり、後に台湾の俳人たちによって俳句に取り入れられた。詳しくは沈美雪「俳句における「台湾趣味」の形成—明治期台湾における俳句の受容と展開を通して—」（『台湾日本語文学報』第25号、P53～P77、2009年6月）を参照。

し、これを実現するための方法を探ったのである。また、上掲の一文にある「其の一欠陥」とは、台湾が「俳諧南方趣味の大森林、熱帯的詩材の大寶庫<sup>19</sup>」であることを認識しながらも、俳人たちの台湾素材の研究やその応用が遅滞としたもので、いまだ多くの進展をみせないという、台湾俳句界の現状を指したものである。そのような事実を歯がゆさを感じた緑珊瑚同人は、碧梧桐の新傾向に台湾俳句の向かおうとする方向を見いだし、新傾向を作句の目標と決めたのであろう。このような背景を持って月刊第1号として刊行された『緑珊瑚』第4巻第1号は、そこに掲載された「緑珊瑚月刊号」、「発刊を祝す」、「新傾向に就て」、「粽趣味」などの文章が、『緑珊瑚』の方向性をはっきりと示しているものといえよう<sup>20</sup>。

また、緑珊瑚会は碧梧桐を指導者として仰いだばかりではなく、碧梧桐派の有力俳人とも交流があり、『緑珊瑚』には碧派俳人の俳信、俳論、近詠を多く載せている。さらに、募集課題の選句を広江八重桜、小沢碧童、荻原井泉水、菅原師竹、入沢春光、中塚一碧楼、中川四明など、碧門屈指の作家に依頼し、彼らの支援により『緑珊瑚』は質の面においても大きな進歩を遂げたのである。

#### 4.2 季の問題と『臺灣歳時記』

俳句は自然を詠む短詩であり、詠み手は、常に季節の推移に注意を払う必要がある。一方、俳句には歳時記という俳句の手引きともいえる書物が存在し、俳句作者は当季にふさわしい季題を歳時記から抽出し、各季題に付随した例句を参考にしながら句作りすることが可能である。また、この歳時記は、季題の確認のほか、過去の秀句が一目で分かり、自作の参考にできるというもう一つの効用がある。換言すれば、歳時記は、季題の手引きとアンソロジーの二つの性質を持っているのである。

しかし、日本、特に京洛の風土を中心に編まれた、従来の歳時記

---

<sup>19</sup> 注17参照。

<sup>20</sup> 「発刊を祝す」は田原天南、「新傾向に就て」は諏訪素濤、「粽趣味」は小林李坪がそれぞれ執筆した（『緑珊瑚』第4巻第1号、P1～P6）。

に収録された季題は、台湾において適用しないものが非常に多い。もちろん、共通の自然現象もあるものの、今まで、まったく見聞きしたことのないような熱帯特有の動植物や、台湾独特の文化や習俗も多数あるからである。また内地と台湾との共通の季節現象といっても、例えば、「暑さ」は緯度の相違から程度の差があるだろうし、その暑さに対する感覚も違ってくるはずである。そのため、台湾に移住した俳人たちは、作句に際して、このような季節感の違いに当然のことながら悩まされていたのである。

このように、内地の歳時記が台湾では適用しないことに対して、李坪は、明治 39（1906）年より『臺灣日日新報』において、台湾の季物を紹介する「水引草」を連載し<sup>21</sup>、その集大成として『臺灣歳時記』（東京政教社、明治 43 年）が出版されたのである。そして、この『臺灣歳時記』の序文を執筆したのが碧梧桐であり、彼は本書の重要性と意義を次のように語っている。

沖繩臺灣の如き風土の異なる地方の季題趣味問題は遂に俳句上の大問題である。李坪子が先づこの大問題に指を染めて臺灣歳時記を編むといふ。臺灣に住む俳人のために幾分の参考となり、事物の統一を缺く内地人に臺灣の特色を紹介するといふ事の他に臺灣の季題趣味の解決に資する第一著手として、其の勞を多とせざるを得ぬ。今後更に臺灣の事情の比較的普遍性を帯ぶる時代の來た時、臺灣特色の俳句が、一地方的特趣として取扱はれる機会に接した時、この書が幾分の功を頒つべきはいふまでもない。この礎の上に年を追うて樓閣の築かれんことを希望するのである。

---

<sup>21</sup> 「水引草」は、小林李坪が執筆し、明治 39（1906）年 9 月 12 日から翌年 5 月まで 41 回にわたり『臺灣日日新報』に連載されたもので、その目的は、台湾の植物や民俗活動を紹介、解説することである。

このように、『臺灣歳時記』の序文において碧梧桐は、日本と風土の異なる地域の自然、人事を季題とする際に、問題が生じることを指摘している。特に、日本以外の土地で俳句を詠む際、従来の季題感覚で居住地の景物を詠むと、現実とはかけ離れた空想の句になってしまう恐れがある。「季題趣味」とは「季のことばにともなう連想作用が引き出す情緒を重んじ<sup>22</sup>」ることであり、碧梧桐は、かつて、季の風物にどう接するかをめぐって、同じ子規門の虚子らと論戦を交わしたことがある<sup>23</sup>。これは、虚子が空想的趣味に重きを置くのに対し、碧梧桐は写生的趣味に重きを置いたといったものであった<sup>24</sup>。そして、碧梧桐の持つこの写生の理念は、後に行われた三千里の旅でさらに固められたといえる。つまり、各地の自然風土と接した碧梧桐が、季の言葉が持つ空想的な美が地方の真実にそぐわないことを認識し、純粋な季題趣味から、景物の新しい感想を発見しようとしたもので、こうして新傾向を唱えるようになったのである。

このような想いを持った碧梧桐は、「己酉間筆 俳句の新傾向に就て=再び」において、「季題の新しい趣味を見出すといふことは、従来養はれた約束を破毀する趣きがある<sup>25</sup>」と、従来の固定化した季題の観念を打破し、写生による新しい趣向の発見を唱えた。また、海外に移住した俳人は、その気候風土の違いから、従来の季題趣味がそれぞれの居住地の風土に移植できない現実を、誰よりもいち早く察知したといえる。この一端は、明治38年から既に叫ばれていた「台湾趣味」の重視や、明治39年からの「水引草」の連載などに現れており、これらは、台湾風土に根ざした作句の重要性に対する台

---

<sup>22</sup> 小室善弘「子規と虚子—「連想」の評価をめぐって」(『国文学 解釈と鑑賞』、2001年12月号、P178～P185)。

<sup>23</sup> 高浜虚子「写生趣味と空想趣味」(『ホトトギス』、明治37年3月号)。

<sup>24</sup> 小室善弘前掲論文参照。

<sup>25</sup> 河東碧梧桐「己酉間筆 俳句の新傾向に就て=再び」(『日本及日本人』、明治42年2月1日、P35～P39)。

湾俳人の抱負を物語っているものといえよう<sup>26</sup>。

もっとも、李坪ら台湾俳人の場合は、従来の季題観念を捨てて、写生のみで新しい季題の創造を試みるというような姿勢で台湾の景物を扱ったわけではないと思われる。ただ、源氏以来の歴史的連想<sup>27</sup>と、固定化した季の言葉の持ったイメージをそのまま句に取り入れることが、その地方独特の気候や景色を映し出すにいかにも不条理であるかということを感じさせられていたのは事実であろう。そんな中、碧梧桐の唱導した新傾向俳句は、季題の扱い方において、地方や海外の俳人にとって誠に有益な指針であり、一つの解決策を提供したものだといえよう。このように支持を強めつつある新傾向について、小林李坪は「粽趣味」において、

所謂新傾向の句を試みんとするには、其趣味の観察たるや、一遍外面の事相に止まらず進て事物の内面に迄踏込んで趣味を捕捉するの必要なると同時に、其の観察は、成るべく廣く成るべく多く、而して成るべく前人未發の題材上より観察することをも必要とするのである<sup>28</sup>。

と述べ、「新傾向」の句を作るには、対象の持つ趣味を広く把握し、従来の季題情緒とは異なる、「事物の内面に迄踏込んで趣味」をとらえる必要があると説いている。

このように、碧梧桐が『臺灣歳時記』の序文において指摘した通り、李坪の『臺灣歳時記』は、台湾の事情を知らない内地人に台湾を知ってもらうためのよき材料となり、また、台湾に住む日本俳人にとって作句の手引きともなった。そして、『臺灣歳時記』は、日本本土以外で刊行された最初の俳句歳時記としての価値はもちろん、新しい素材の開発、新趣向の発見において、まさに画期的な存在と

---

<sup>26</sup> 注 18 沈美雪前掲論文参照。

<sup>27</sup> 注 23 参照。

<sup>28</sup> 小林李坪「粽趣味」（『緑珊瑚』第 4 卷第 1 号、明治 43 年 8 月、P4～P6）。

いわねばならないものだろう。

## 5. 『緑珊瑚』の廃刊と新傾向俳句運動の衰微

明治末期に興った新傾向俳句運動は、日本俳壇を風靡し、台湾俳句界も緑珊瑚会の俳人を筆頭に多くの支持者を集め、従来の季題趣味よりも実感に基づいて対象の趣をとらえて表現する作句への姿勢が唱えられた。

そして、碧梧桐は、明治42(1909)年3月1日の『日本及日本人』(「己酉間筆」)で、俳句の上に現れた新傾向を「心感的」、「実在的」、「印象的」、「化合物的」、「生活に近づく」、「擬画法」、「抽象的具象」、「動揺」、「地方的特習」、「用語」の10項目に整理した。また、そのうちの「地方的特習」については、

詩は普遍的性質を帯びねばならぬといふことゝ、地方的特習を詠むといふことは、皮相の観察では殆ど相反したことではあるけれども、一方自己の経験を主とする点から言へば、地方的特習の趣味の發揮されないやうな文學は、幼稚な單純な文學であるとも言へる。寒帯に育つ者も、熱帯に生まれた者も、同一趣味を謡うてをるやうでは、遂に季題に對する個性の闡盟する時代はないと思う。

と述べている。そして、この文中にある「寒帯に育つ者も、熱帯に生まれた者も」の一節は、台湾を訪れたときの実体験を念頭においての発言ではないかと思われる。つまり、地域の特性を表現できないやうな文學は、その土地に根ざしていない植物のようにすぐに枯れてしまうということをいいたかったと思うのである。そして、特に、俳句においては自分の経験に基づいた、土地の特性を發揮するやうな努力が必要であることを説いたのであろう。また、この考えは、李坪ら台湾俳人が大いに宣伝した「台湾趣味」の趣旨と一致しているといえよう。

その後、碧梧桐は、明治 43 (1910) 年に、中心点に拘泥せず、自然現象はそのまま描写されるべきであるという「無中心論」を主張し、これを新傾向俳句の帰着点としたものの、「俳句という極小の詩型の中での詩精神の散文的解体の陥穽へとちかづくに至っている<sup>29)</sup>」(燧柞森子「河東碧梧桐の印象」) ことで破綻を来たすことになるのである。まず、新傾向俳句は内部分裂を始め、大須賀乙字は「季題趣味の移動は極めて緩慢に自然に行はれるべきで、人為的突飛の移動は俳句を亡す<sup>30)</sup>」と、伝統尊重と古典復帰を唱え、碧梧桐を批判した。さらに、中塚一碧楼、荻原井泉水らは、季題趣味の伝承的な情緒を捨て、非定型で季題の有無に拘らない俳句である自由律俳句に走り、独自に新しい新傾向論を展開したことで碧梧桐と袂を分かつたのである。そして、台湾の俳句界もこの情勢変化を敏感に感じ取り、李坪は「年頭の感」の一文において、

期月にして一生面を開くを見んと期待せられたる俳句の新傾向論も、碧氏の旅行と共に下火となり、存外轍底するに至らず、僅かに構想描寫の精緻新語造語の案出、新季題趣味の捕捉位の所にして年暮れたり、生面を開きたるよりせは、大に開きたりとすへく、開かざるよりすれば、大に開かさりしとすへし。更に吾々の特殊的努力問題の上より見んか、新季題の選擇、南方趣味の發揚など、吾人の特に努力せんと企圖したる問題、又多くは懸案となつて今に残れり、努力したるよりすれば、大に努力したりとすへく、努力せざるよりすれば、大に努力せさりしとすへし<sup>31)</sup>。

と述べ、新傾向俳句運動が徹底できない一面を見抜きながらも、「構

---

<sup>29)</sup> 燧柞森子「河東碧梧桐の印象—その功罪について」(『国文学 解釈と鑑賞』1983年2月号、P108~P112)。

<sup>30)</sup> 大須賀乙字「新傾向句の短所」(『蝸牛』、明治43年3月号)。

<sup>31)</sup> 小林李坪「年頭の感」(『緑珊瑚』第5巻第1号、明治44年1月、P1~2)。

想描寫の精緻新語造語の案出」、「新季題趣味の捕捉」などの点が、俳句の近代化を示す提言として評価し得るものがあつたことを認めた。特に、「新季題趣味の捕捉」の点においては、地方や海外にいる俳人にとって深刻、かつ切実な問題であり、表現技法の可能性の一つという程度のものでは決してないといえよう。そして、日本と気候風土のまったく異なる地域の風景を、どのように俳句に表現し、また、俳句という極小な詩型の中で事物の持つ趣をどのように表現するのかは、台湾を始めとして海外で生活する日本の俳人らが、解決しなければならない重要な問題となつたのである。

このような状況の中、台湾趣味の研究と発揚を目標の一つに掲げた俳誌『緑珊瑚』は、明治44(1911)年3月、第5巻第2号をもつて、急きよ停刊となつた。これは、財政面での困難が直接の原因である<sup>32</sup>とされている。ただ、『緑珊瑚』は廃刊になつたものの、句会活動は有志者によつて継続されたのである。

## 6. 二度目の渡台

その後、碧梧桐は、昭和3(1928)年に56歳で再び台湾の地を踏み、台北の素濤や新竹の一呱(天仙果)、台南の青夢など、旧緑珊瑚会俳人の歓待を受けた。そして、この渡台の目的について、素濤の「二度の渡台」では、『海紅』の印刷代を稼ぐための来訪であつた、と述べている。また、台湾に着いた10月18日の夜は、北投のさらに奥にある草山温泉の巴旅館で句会が催されたという。このとき、同行した者は18名で、うち、2、3名を除く多くの同行者は、1泊したとも記されている。そして、21日に行われた句会が、今回の旅において最も盛大なものであつたが、それについて、以下のよう

---

<sup>32</sup> 発刊停止の直接の原因については、緑珊瑚会の諏訪忠蔵(素濤)編『追悼句集天仙果』(俳人毛利誠意の追悼集、昭和5年10月刊行)によると、『緑珊瑚』は経済難からついに廃刊となり、また、編集者である渡辺常三郎(黙行)の死により、莫大な印刷費は、責任者の一人である毛利誠意(天仙果、旧俳号一呱)が負担することになつたとされている。

に述べられている。

草山の句會は内輪の會で二十一日に堂々と新聞に書き立て、西洋料理店ライオンで句會をやって二十七名の會合を得たのが最も盛大なものであつた。

一夜新傾向に就ての講演会もやつて盛大ではあつたが、新人は僅に一人しか得られなかつた<sup>33</sup>。

このように、今回の句会は、1度目の訪台時の参加者 80 名以上といった盛況ぶりとは比べようもなく、参加者が激減したことが分かる。また、新傾向について講演するものの、新人は一人しか得られず、台湾における新傾向俳句の衰退を物語っているものといえよう。

それでも、碧梧桐は旧緑珊瑚の俳人から丁重にもてなされ、素濤の『追悼句集天仙果』によれば、2回目の台湾の旅は、台北、新竹、台中、台南、嘉義に及び、「苔の会」（台北）、「新竹句会」（新竹三昧会）などと句会を催した。ただ、これらの各会も、ホトトギス系のものと比べて勢力はなく、ホトトギス系が主流の昭和期の台湾俳壇において、異色の存在といえるものであつた。ただ、肝心の印刷代の捻出については、

中南部では故毛利天仙果、坂本呑空らが大いに助勢して呉れて、基隆を立つ時總勘定をすると三千五百圓の稼ぎ高であつた、意外の収穫に碧氏は驚いて、君感謝する、<sup>〆</sup>を繰返して歸航の船に乗つたのであつた。

恐らく碧師が筆行脚をした内で収穫の最も多かつたのは臺灣であつたらう<sup>34</sup>。

---

<sup>33</sup> 注 10 参照。

<sup>34</sup> 前注参照。

と、当初に予想していた 1,500 円を大幅に上回る成果を収め、台湾を訪れた目的は、一応、達成しているものといえよう。

## 7. おわりに

河東碧梧桐は、明治 39 (1906) 年から中断を挟みつつ 3 年 6 カ月にわたり、新傾向俳句を広めるべく全国俳句行脚を行った。また、この行動は日本本土のみにとどまらず、台湾、南洋、満州、朝鮮などの海外の地を旅し、日本と異なる風土を自ら体験もした。この旅の一つである、明治 41 (1908) 年の台湾訪問において、碧梧桐は、多くの俳人を啓発し、また、彼らの創作欲を刺激したのである。一方、台湾居住の俳人は、小林李坪を筆頭に新しい南方季題趣味＝台湾趣味の発見、開拓に取り組んだ。もっとも、台湾趣味は、碧梧桐によって触発されたとの主張ではないが、碧梧桐の唱えた新傾向俳句における季題の接し方、すなわち、写生の手法による新趣味の発見という提案と理念が合致したことから、新傾向俳句が緑珊瑚会の俳人を中心に、台湾俳句界に大いに歓迎され、また、当時における作句の目標ともなったといえよう。

このように、台湾における新傾向運動の展開は、明治末期から大正初期にかけて全盛を極めた。そして、新傾向の主張において、特に、季題についての提言は、海外で生活する日本俳人にとって、まさに救いの教えといえるものである。つまり、当時の俳壇をリードしていた碧梧桐の「保証」を得られたことで、地方や海外の俳人は、従来の季題趣味よりも現地の風土に即した感興によって作句するといった、いわば、安堵感を獲得したのである。しかし、台湾においては、碧梧桐の新傾向俳句の主張には賛同したものの、季題廃棄、定型破壊という、自由律の主張にまで同調する俳人は多くはいなかったのも事実である。そして、台湾の季題を集めた小林李坪の『臺灣歳時記』も、日本の季題との比較において台湾趣味を解説研究し、新しい趣味の開拓を目的に編まれたものであり、季題そのものの重要性と働きを否定するものではなかった。とはいうものの、「季題

の新しい感想を発見して大膽に縦横に描出<sup>35</sup>」するといった新傾向俳句の主張が、台湾の俳句界を啓発し、大正、昭和期にさらに展開していく台湾俳句の基礎を作ったといっても過言ではなからう。

本稿は、2009年5月16日、中国文化大学で開催された「中国文化大学日本研究国際学術研討会—文化・社会・言語・文学—」における発表「碧梧桐と句会「緑珊瑚会」—台湾における新傾向俳句の展開について—」をもとに、大幅に加筆・修正を加えたものである。

※2010年2月28日受理 2010年5月9日通過審査

---

<sup>35</sup> 大須賀乙字「「日本俳句」評論」(『アカネ』、明治41年3月号、P44～P49)。